

高崎市文化財調査報告書第203集

保渡田徳昌寺前Ⅱ遺跡

上郊保育園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

高崎市教育委員会

序

群馬県高崎市は関東平野の北西部に位置し、古くから交通の要衝として栄えました。当市の北にそびえる榛名山は上毛三山のひとつとして名高く、この緩やかな裾野から平野部にかけて広がる市域は、風光明媚な土地柄です。遺跡の発掘調査が実施された群馬地区では多くの遺跡が知られており、中でも保渡田古墳群や三ツ寺I遺跡、北谷遺跡などの古墳時代の遺跡が有名です。古代の遺跡では上野国分寺跡もあります。

今回報告する保渡田徳昌寺前Ⅱ遺跡は、上郊保育園建設に先立ち発掘調査されました。本遺跡からは古代の人々の生活の痕跡が見つかり、隣接する保渡田徳昌寺前遺跡に連なる集落跡として理解できます。当市ではこうした集落遺跡が数多く発掘調査されており、本遺跡の調査成果も地域の歴史を考えるうえでの貴重な資料のひとつとなりました。

最後に、発掘調査を行うにあたって関係者の方々に多大なご協力を賜ったことを感謝申し上げます。

高崎市教育委員会 教育長 砂田 威夫

例言

1. 本書は、群馬県高崎市保渡田町徳昌寺前2001番地に所在する保渡田徳昌寺前Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、上郊保育園建設に伴う事前記録保存のための発掘調査である。
3. 本調査は、群馬町教育委員会直営で実施した（合併以前）。
4. 発掘調査は、平成17年6月8日～22日の期間で実施した。
5. 発掘調査組織は以下の通りである。

《合併以前》

群馬町教育委員会生涯学習課文化財保護係

教育長 鈴木越夫

事務局長 設楽節子

生涯学習課長 相澤二郎

課長補佐 齋藤かずみ

文化財保護係長 若狭 徹

主査 田辺芳昭

行政嘱託員（事務）大山美智子

（文化財専門）大塚美恵子 山田琴子 水谷貴之

《合併以後》（平成18年1月23日より）

高崎市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財担当

調査組織

教育長 砂田威夫

教育部長 石綿和夫

文化財保護課長 高木三昭

埋蔵文化財担当課長補佐 神戸聖祐

〃 齊藤かずみ

主任学芸員 若狭 徹（担当）

〃 田辺芳昭

行政嘱託 水谷貴之（担当）

6. 本調査は若狭・水谷が担当し、報告書作成に係わる編集・原稿執筆は水谷が行った。

7. 本書掲載資料は高崎市教育委員会が保管している。

目次

序・例言・目次・報告書抄録

I. 調査に至る経緯	1
II. 遺跡の位置と環境	1
III. 検出された遺構と遺物	5
IV. まとめ	10

写真図版・奥付

報告書抄録

ふりがな	ほどたとくしょうじまえにいせき
書名	保渡田徳昌寺前Ⅱ遺跡
副書名	上郊保育園建設に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第203集
編著者名	水谷貴之
編集機関	高崎市教育委員会
編集機関所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35番地―1
発行年	平成18年3月10日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
保渡田 徳昌寺前Ⅱ遺跡	群馬県高崎市 保渡田町2091	102020		36 2300	138 5915	H17.6.8～ H17.6.22	320㎡	上郊保育園建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
保渡田徳昌寺前Ⅱ遺跡	集落跡	古代 中世以降	竪穴住居跡 3 井戸 1	土師器・須恵器	

I. 調査に至る経緯

高崎市保渡田町徳昌寺前（合併以前は、群馬町大字保渡田字徳昌寺前）地内において上郊保育園の新設が計画され、平成16年9月10日付で群馬町役場福祉課（当時）より埋蔵文化財包蔵地の照会がなされた。

本地域は周知の埋蔵文化財包蔵地に該当しており、且つその南隣接地では平成元年に発掘調査が実施され、古墳時代から平安時代にかけての集落が確認されていた（保渡田徳昌寺前遺跡、群馬町埋蔵文化財調査報告第58集）。このことから、本地域に埋蔵文化財が存在することは確実視され、保渡田徳昌寺前遺跡の調査所見からは濃密な遺構分布が予想された。一方、遺構確認面は表土下20～30cmと浅く、工事用重機による簡単な整地作業でも遺構を損壊する危険性が高いとの判断がなされた。

以上のことから、本地域において試掘調査を実施し、具体的な遺構分布状況を把握した上で本調査が必要になる旨を回答した。

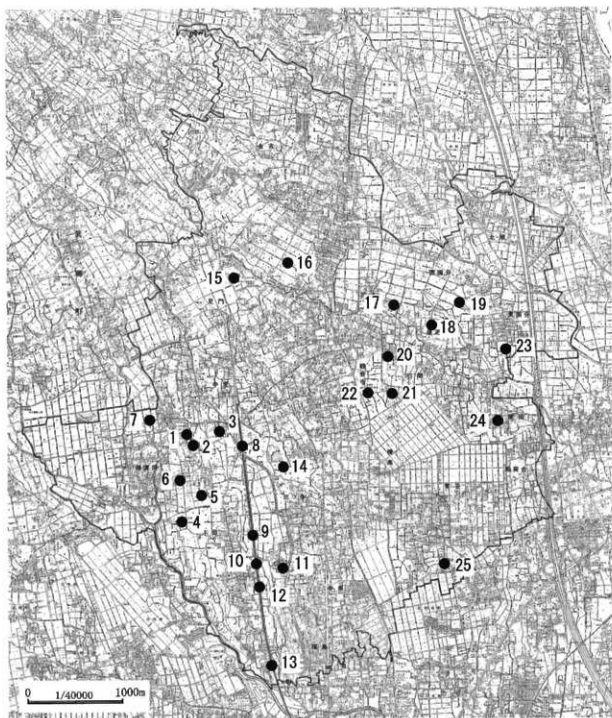
こうした協議を受け、平成17年3月、本地域において試掘調査を実施した（町内遺跡XⅠ、群馬町埋蔵文化財調査報告第71集）。開発対象面積4900㎡にトレンチを設定し調査した結果、当初予想された濃密な遺構分布状況は確認できず、本地域の南端部分で竪穴住居跡が確認されたのみであった。よって、保渡田徳昌寺前遺跡で調査された集落はその北方に大きく展開することではなく、この竪穴住居跡付近が集落の北縁に相当するとの所見を得た。

この試掘調査の結果により、当初前提とされていた開発対象地全面にわたる発掘調査の予定は修正され、その南端付近に限定した調査区を設定することとなった。こうして平成17年6月、320㎡を対象として本調査が実施された。

Ⅱ. 遺跡の位置と概要

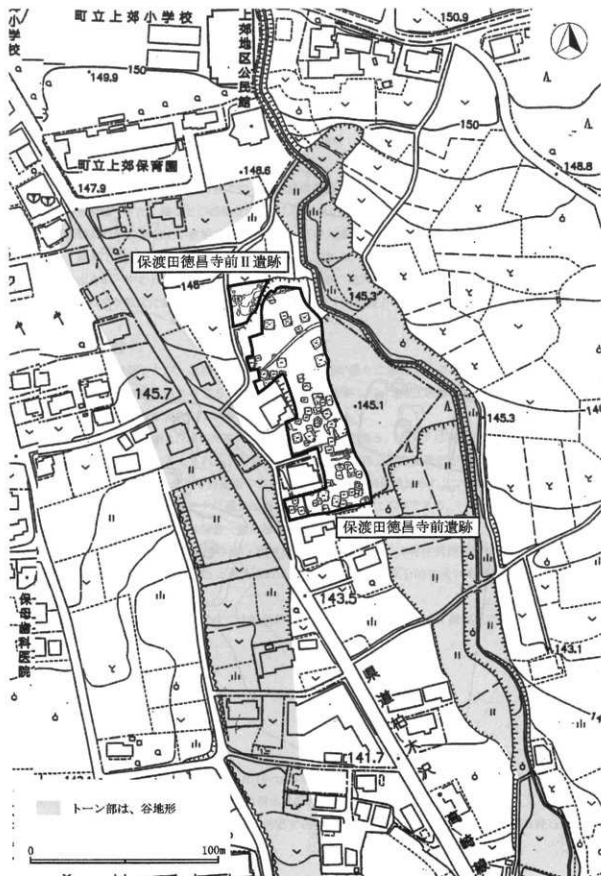
高崎市保渡田町は関東平野の最奥部、榛名山の東南麓に位置し、標高110mから200m付近を占める。保渡田町を含む群馬地区は、「相馬ヶ原扇状地」と呼ばれる山麓扇状地形上に広がり、東南方向に緩く傾斜しながら標高130mほどで平野部の前橋台地に移行していく。地区には幾つもの中小河川が流下し浸食谷を発達させているが、これらのほとんどが扇状地面に起源を持つものである。このような小河川のひとつに唐沢川がある。今回報告する保渡田徳昌寺前Ⅱ遺跡は、この流路から400mほど西方、標高147m付近の緩傾斜面上に位置する。遺跡の所在地はその東西を南北走向の谷によって挟まれた狭長な台地上で、主要地方道「前橋・安中・富岡線」と県道「柏木沢・高崎線」が交差する「井出」交差点から、後者の道路沿いに1.5kmほど北上した場所である。周辺では多くの遺跡が確認されている。一例として、本遺跡から唐沢川を挟んだ東側の台地上では保渡田東遺跡が調査されており、奈良・平安時代の集落が確認されている。また、本遺跡の南西500mには国指定史跡保渡田古墳群が存在する。

本遺跡の調査面積は約320㎡である。遺構確認は表土直下の暗褐色土層で行った。この土層は本来的には浅間C軽石を含む黒色土層下に認められるものであるが、今回の調査区内ではこの黒色土層は残っていなかった。ここから検出された遺構は、8世紀代と考えられる竪穴住居跡が3軒、中世以降と考えられる井戸跡が1基である。このうち3軒の竪穴住居跡は、南隣接地の保渡田徳昌寺前遺跡で発掘調査された集落に連なるものである。さらに、試掘調査によって本遺跡の北側には遺構が存在しないことが判明していることから、本遺跡はその集落の北縁部分に相当するものとみられる。



- | | | | | |
|---------------|--------------|---------------|--------------|-------------|
| 1. 保渡田徳昌寺前Ⅱ遺跡 | 2. 保渡田徳昌寺前遺跡 | 3. 保渡田東遺跡 | 4. 二子山古墳 | 5. 八幡塚古墳 |
| 6. 薬師塚古墳 | 7. 保渡田荒神前遺跡 | 8. 保渡田・三ツ寺Ⅲ遺跡 | 9. 三ツ寺Ⅱ遺跡 | 10. 三ツ寺Ⅰ遺跡 |
| 11. 中林遺跡 | 12. 井出村東遺跡 | 13. 熊野堂遺跡 | 14. 堤上遺跡 | 15. 寺屋敷古墳群 |
| 16. 如来古墳群 | 17. 北谷遺跡 | 18. 後正間遺跡 | 19. 西国分Ⅰ・Ⅱ遺跡 | 20. 西三社免遺跡 |
| 21. 小池遺跡 | 22. 榎高遺跡群 | 23. 上野国分僧寺 | 24. 国府南部遺跡群 | 25. 菅谷地区遺跡群 |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 調査区的位置

Ⅲ. 検出された遺構・遺物

(1) 竪穴住居跡

H-1号住居跡

調査区の北西部で検出した。平面形態は長方形で、東西4.8m・南北3.0mの規模を測る。遺構の深さは平均20cm程度である。

カマドは北壁の北東コーナー寄りに付設される。袖部の構築には暗黄褐色土が主体として用いられ、局所的に黒色土の使用も観察できた。櫓などの構築材は出土していない。このカマドの東脇には貯蔵穴が検出された。

本住居の床面は部分的に黒色土が使用されるものの、その大部分は地山を床としている。また、カマド前面の硬化は極めて顕著であるが、それ以外は比較的軟弱な床である。また、本住居のほぼ中央には南北に長い不整形の土坑が検出され、いわゆる床下土坑としてとらえている。柱穴は検出されなかった。

出土遺物は主にカマド前面に多く、土師器・甕がある。床下土坑覆土中からは砥石の破片が出土している。

H-2・3号住居跡

遺構確認時に重複を確認したが、実際は住居壁面上端付近が僅かに重複するのみであった。そのため、土層観察による新旧の判定は難しいものであったが、2号住居跡が新しく、3号住居跡が古いと判断している。また、両住居跡ともに東側壁面を欠失している。

2号住居跡は南北3.5m・東西2.7m(残存長)・深さ40cmの規模を測る。カマドは検出されていないが、損なわれた東壁に設けられていたと考えられる。ちなみに、住居跡東側部分の床面硬化が著しく、少量の焼土分布も認められた。ピットが3ヶ所、それぞれ壁面のコーナー付近で等間隔に検出されている。本来的には4本柱穴であったであろうが、やはり南東コーナー部分は損なわれているために不明である。

遺物は土師器・甕、須恵器・長頸壺・甕の破片が出土した。

3号住居跡は南北3.6m・東西3.8m(残存長)・深さ55cmの規模を測る。2号住居跡同様に東側の床面の硬化が強く、カマドは東壁に付けられていたと考えられる。また、北壁では部分的に浅い周溝が、その他に2基のピットが確認できた。

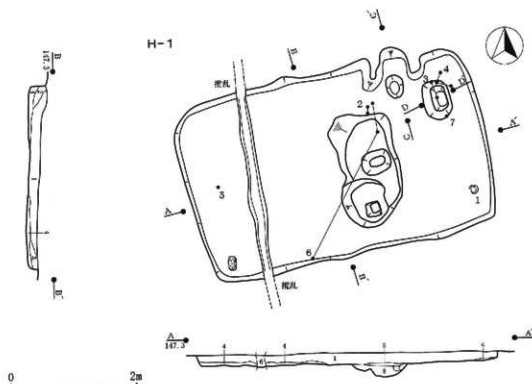
出土遺物は僅かである。図示したのは全て土師器で、№15は覆土中でも極めて確認面に近い上層部分から出土した。№17は模倣杯の小破片である。

(2) 井戸跡

I-1号井戸跡

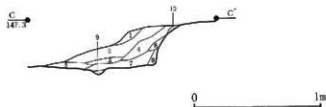
調査区の北東隅付近で確認された。直径1m10cmの素掘りの井戸と考えられる。確認面からの深さは1m80cmを測り、これが底面である。調査時点では湧水は認められなかった。

出土遺物は土師器の極小破片のみであり、時期決定できるものではない。ただし、覆土に浅間B軽石が多く含まれており、中世以降の所産であると考えられる。



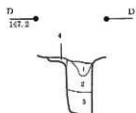
H-1

1. 暗褐色土 角文やや多く含む F A層少量含む
2. 暗褐色土 角文少ない
3. 暗褐色土 (1層より明るく4層より暗い)
4. 褐色土 F Aブロックより1cm以下含む
5. 暗褐色土主体として、焼土ブロック・F Aブロック・C層ブロック混合する
6. 灰土 炭(中層)含む
7. 赤褐色土 地山(明黄褐色)粒含む
8. 地山ブロック(明黄褐色)と暗褐色土の混合



H-1 カマド

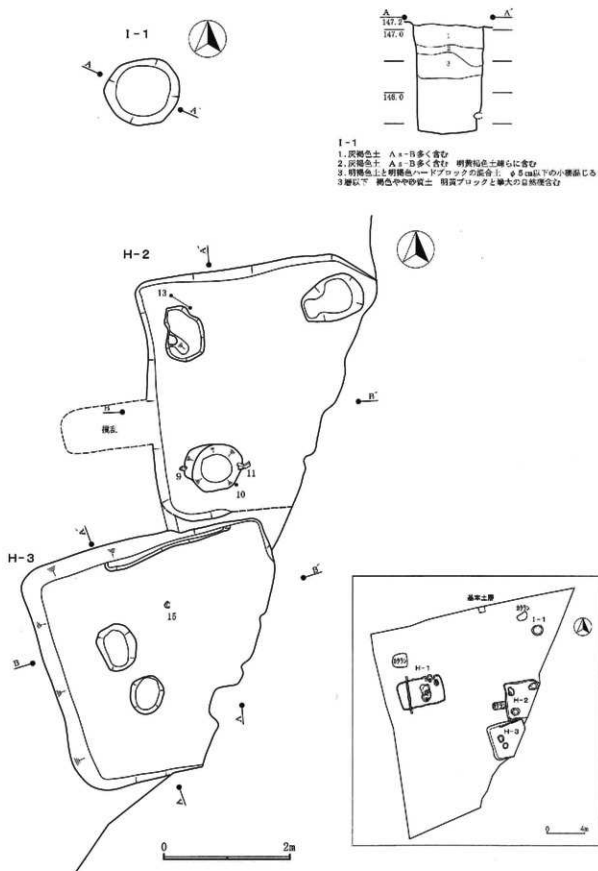
1. 褐色土 地上に細く少量含む
 2. 褐色土 焼土粒・炭化物少量含む 1層より明るい
 3. 褐色土と焼土ブロックの混合
 4. 褐色土 焼土粒・炭 1cm程度のブロック含む(明瞭強い)
 5. にぶい褐色土 焼土粒・炭・少量含む
 6. にぶい褐色土 焼土粒・炭・少量含む(黄褐色強い)
 7. 灰土 炭少量含む
 8. 暗褐色土 炭少量含む
 9. にぶい黄褐色土 (黒く混ざっていない)
 10. 暗褐色土 地山質で焼土粒少量含む
- ※全層約に粘性土やある程度、その中で4層が最も粘性あり
カマドは暗褐色土(炭あり)で構成するが部分的(外壁部分)にC層混り付いている



貯蔵穴

- | | | |
|------------|---------|---------|
| 1. にぶい暗褐色土 | 焼土粒少量含む | } 細まり弱い |
| 2. 暗褐色土 | 焼土粒少量 | |
| 3. 暗褐色土 | 2層より暗い | |
| 4. 暗褐色土 | 中や粘質 | |

第4図 H-1号住居 平面図・セクション図



第5図 H-2・3号住居・I-1 平面図・セクション図

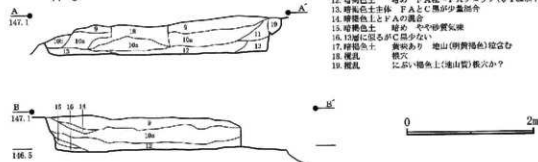
H-2



H-2 H-3

- | | |
|-----------------|--------------------------------------|
| 1. 暗褐色土 | D/Aブロック・C黒ブロック(鉄に $\phi 30$ 以下)散らかる |
| 2. 暗褐色土 | F/Aブロック($\phi 20$ 以下) やや多き穴 |
| 3. 暗褐色土 | F/A鉄・多し成生草 |
| 4. 暗褐色土 | 明めD/A鉄多き穴付 |
| 5. 灰色褐色土 | F/A鉄・ $\phi 10$ 以下(粗面)多き穴付 |
| 6. 暗褐色土 | F/A・基土に近づく |
| 7. 暗褐色土 | F/A鉄含む |
| 8. 明褐色土 | 部分的にブロック付 |
| 9. 暗褐色土 | F/A鉄・F/A鉄含む |
| 10. a. 暗褐色土 | F/A鉄多し |
| b. 暗褐色土 | F/Aブロック層に多い |
| 11. 10層よりF/A少ない | |
| 12. 暗褐色土 | 主母 F/A鉄・F/Aブロック($\phi 10$ 以下) やや多き穴 |
| 13. 暗褐色土 | 主母 F/A鉄・F/A鉄が集合 |
| 14. 暗褐色土 | F/A鉄・F/Aの集合 |
| 15. 暗褐色土 | 結核 やや砂質成壤 |
| 16. 13層に近づく | C鉄少ない |
| 17. 暗褐色土 | 黄褐色付 地山(明褐色)粒含む |
| 18. 黄泥 | 黄褐色付 地山(黄褐色)粒含む |
| 19. 黄泥 | 黄褐色付 地山(黄褐色)粒含む |

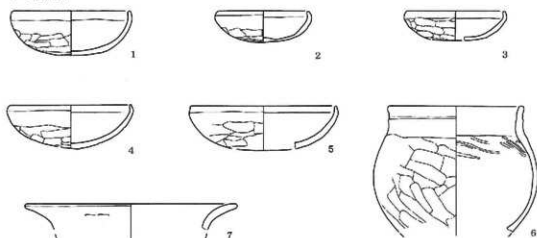
H-3



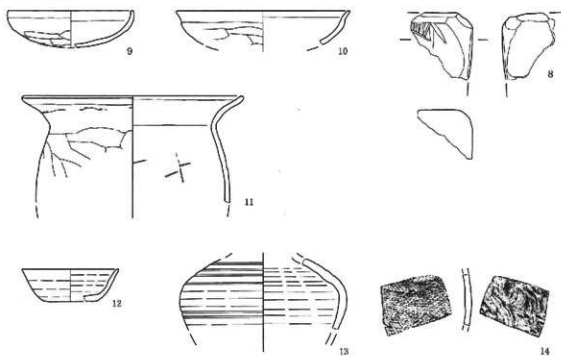
番号	通稱	種別	計測値 (後元盆)・《残存額》 A: 口縁/D: 高さ/C: 底径・中径	器形・器形の特徴	色調・胎土・焼成	残存度
1	H-1	土師器 A	12.4 / B 4.7	口縁微隆で、外面凹凹り、内面微で、	褐色、やや黄褐色、白・黒色粒含む、良好。	口縁1/3欠
2	H-1	土師器 A	9.5 / B 3.3	口縁微隆で、内縁、外面凹凹り、内面微で、	褐色、やや黄褐色、白・黒色粒含む、やや良好。	口縁1/4欠
3	H-1	土師器 A	10.3 / B 3.1	口縁微隆で、内縁、外面凹凹り、内面微で、	明赤褐色、やや黄褐色、白・黒色粒含む、良好。	口縁・底形一部
4	H-1	土師器 A	12.8 / D 4.7	口縁微隆で、内縁、外面凹凹り、内面微で、	明赤褐色、やや黄褐色、白・黒色粒含む、やや良好。	口縁1/4欠
5	H-1	土師器 A	15.6 / B 4(5)	口縁微隆で、内縁、外面凹凹り、内面微で、	褐色、やや黄褐色、白・黒色粒少量含む、良好。	口縁1/6残
6	H-1	土師器 A	14.4 / B 13(3)	口縁微隆で、外面凹凹り、内面微で、	にない褐色、やや黄褐色、黒土入り多量含む、やや良好。	口縁一断面1/8残
7	H-1	土師器 B	22.4 / D 22.7	口縁微隆で、	にない赤褐色、やや黄褐色、白・黒色粒含む、やや良好。	口縁小破片
8	H-1	埴土 B	長 63.9 幅 32.3 厚 62.5	条状の埴土片有り、重量 370g	灰白色だが黒ずり、石が混在で、やや軟質、	小破片
9	H-2	土師器 A	13.0 / D 3.9	口縁微隆で、外面凹凹り、内面微で、	明赤褐色、やや黄褐色、白・黒色粒・小白土少量含む、良好。	全形の1/3残
10	H-2	土師器 A	18.4 / D 3.5	口縁微隆で、外反、外面凹凹り、内面微で、	外面に灰白色釉、内面に明褐色。網目、黒色粒含む、やや良好。	口縁・底部1/6残
11	H-2	土師器 B	23.4 / B 11(2)	口縁微隆で、外面凹凹り、内面微で、	褐色、やや黄褐色、白・黒色粒含む、やや良好。	口縁・断面1/3残
12	H-2	埴土器 A	10.22 / B 3.4 / C(5.6)	口縁口縁部、底部凹凹り微なり	灰色、黄褐色、白色粒含む、良好。	口縁・底部1/6残
13	H-2	灰土器 B	27.53	口縁口縁部、	灰→灰白色。網目、白色粒含む、やや良好。	断面1/4残
14	H-2	土師器 B	65.40	外面斜に中凹目、内面平で片隆。	灰白色、やや黄褐色、白・褐色粒含む、やや良好。	底部小破片
15	H-3	土師器 A	10.1 / D 2.9	口縁微隆で、内縁、外面凹凹り、内面微で、	明赤褐色、やや黄褐色、黒土入り多量含む、良好。	口縁1/2欠
16	H-3	土師器 A	12.4 / D 2.5	口縁微隆で、外面凹凹り、内面微で、	にない褐色、やや黄褐色、白・黒色粒含む、良好。	口縁1/5残
17	H-3	土師器 B	8.35	口縁微隆で、	黄褐色、やや黄褐色、白色粒含む、やや不良。	口縁小破片
18	稲垣田 式部墓	灰土器 A	8.24 / D 2.6(5)	口縁口縁部、底部凹凹り微なり。	灰色、黄褐色、白色粒含む、良好。	底部1/5残
19	稲垣田 式部墓	埴土 B		横位 1.81cm。	にない赤褐色。	小破片

第6図 H-2・3号住居 セクション図・遺物観察表

(H-1号住居跡)



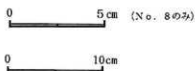
(H-2号住居跡)



(H-3号住居跡)



(確認面)



第7図 H-1・2・3号住居跡出土遺物

(3) その他

本遺跡に隣接する保渡田徳昌寺前遺跡では7条の溝が検出されている。その内、東西走行のM9号溝が本遺跡方向を指向するが、それに該当する溝は調査区内では検出されなかった。両遺跡間の境界部分で収束している可能性が考えられる。ちなみに、M9号溝は上幅40cm程、深さ20cm弱の浅い溝である。

また、遺構確認面からは須恵器杯と縄文土器の小破片が表採されている。縄文時代の遺物は、保渡田徳昌寺前遺跡から前期を主体とする土器片などが出土している。

IV. まとめ

前述したように、本遺跡は南に隣接する保渡田徳昌寺前遺跡（以下、徳昌寺前遺跡）で確認された集落に連続するものである。今回の調査とこれに先立つ試掘調査の所見から、本遺跡はこの集落の北縁部分に相当することが判明している。そこで、本遺跡と試掘、および徳昌寺前遺跡の調査成果を概括し、まとめにかえたい。

本遺跡で主体となる遺構は、8世紀初頭頃と考えられる3軒の竪穴住居跡である。H-2号住居跡とH-3号住居跡は重複し、前者が新しく後者が古いと判断しているが、期的には大きな隔たりはないと考えられる。その他、井戸跡が1基調査されているが、これは覆土の状態から中世以降の所産である。

徳昌寺前遺跡では75軒の竪穴住居跡が検出されている。6世紀後半～7世紀前半に集落が形成され始め、10世紀代まで継続するものと考えられている。徳昌寺前遺跡の調査報告書では、この集落の期的推移と周辺遺跡を含めた土地利用のあり方が詳細に検討されている。このうち集落推移をみると、期的主体となるのは7世紀後半の24軒と竪穴住居とされる。これらは調査区の北半部分に散在し、時期が下るにつれ南半部分に移行する傾向が指摘されている。8世紀代では南半部分への展開がみられ、9世紀以降になるとさらに調査区南縁部に集中するという。本調査で検出された3軒の住居跡はやや時期が下るものの、徳昌寺前遺跡で期的主体をなす一群に含まれると考えられ、指摘された集落推移の傾向と大きく矛盾するものではない。

一方、本遺跡と徳昌寺前遺跡の集落は南北に長い狭長な台地上に占地する。台地の東西は谷地形となっており、その間の台地部分の幅は50mほどである。本遺跡の調査に先立つ試掘調査の所見では、本遺跡の北方20m付近で台地西側の谷が大きく東にクランク状に張り出していることが確認され、これと東側の谷の間は17mほどであった。よって、集落の占地する台地は本遺跡の北で急激に幅狭となっていることがわかった。試掘調査ではこの付近では遺構が確認されておらず、徳昌寺前集落の北縁は本遺跡H-1号住居跡周辺となる。その要因として台地を囲むように存在する谷地形による規制を再認識できる。

本遺跡の調査によって集落の北縁が判明し、東・西縁を含めて谷地形によって規制されていることが確認できた。しかし、台地南側への集落展開のあり方は不明確な部分がある。東西の谷地形は南方に下るにつれ広がる様相を見せ、集落の南縁の状況は気になる問題である。現段階では徳昌寺前遺跡の調査区南端に平安期の住居跡の集中が指摘されるにとどまる。いずれにせよ、さらに南への集落展開は予測でき、今後、周辺地域における発掘調査の留意点となる。

《参考文献》

- 『保渡田徳昌寺前遺跡・三ツ寺大下IV遺跡』 2001 群馬町埋蔵文化財調査報告第58集 群馬町教育委員会
『町内遺跡』X I 2005 群馬町埋蔵文化財調査報告第71集 群馬町教育委員会



調査区全景（北東→）



H-1号住居全景



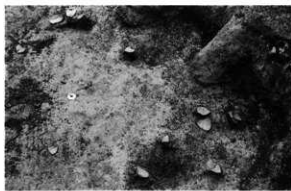
H-1号住居土層



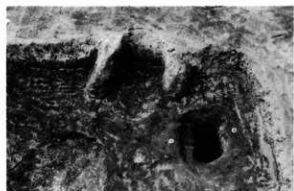
H-1号住居カマド土層



H-1号住居遺物出土状況



同 左



H-1号住居カマド・貯蔵穴



作業風景

図版 2



H-2・3号住居全景



H-2号住居土層



H-3号住居土層



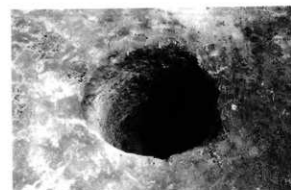
H-2号住居遺物出土状況



H-3号住居遺物出土状況 (No.15)



作業風景



I-1号井戸全景



I-1号井戸土層



1



2



3



4



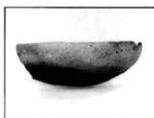
5



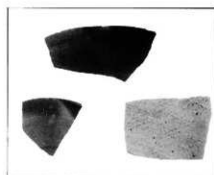
7・8



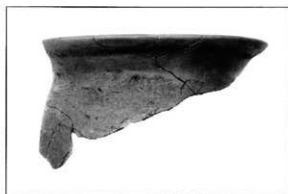
6



9



10・12・14



11



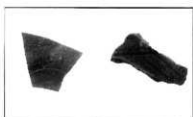
13



15



16・17



18・19

高崎市文化財調査報告書第203集

保渡田徳昌寺前Ⅱ遺跡

上郊保育園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年3月7日 印刷

平成18年3月10日 発行

編集 高崎市教育委員会
発行 高崎市教育委員会
印刷 上毎印刷工業株式会社
